

我が国では、既にテレビでステレオや二カ国語を放送する音声多重放送が行われている。放送衛星の実用化進展がめざましく、第三世代のテレビといわれる高品位なワイドテレビなどの登場が期待される。

有線放送 本村における有線放送の先駆は、南富良野村農業協同組合から浅野牧場三〇戸へ、ラジオ番組のほか、村内のニュースを放送したことで、昭和二四年五月であった。『村史』では、次のように述べている。

南富良野村農業協同組合で総務係をした高橋瑞穂は有線放送の先進地を見て、無電地帯の多い本村にも文化の恩恵を与えたいと考えていた。その頃浅野牧場の滝春吉という人が蓄音機を買いたいと話したので、ラジオを取付る様にすめ、無電地帯であっても有線放送という便利な方法があることを教えた。早速中富良野村農業協同組合の施設を視察して浅野牧場三十戸で相談したが、二千元で施設出来るというので話がまとまり、上富良野村奈良ラジオ店で本機を製作し部落の人々が架線の柱を出し合って農協の人々と協力して完成し、昭和二十四年の春五月、農協から放送を開始し、ラジオ番組の外、村内のニュースも提供したのである。

この有線放送は、その後一般化し、幾寅全体に普及、翌二五年には、落合、鹿越、金山、下金山の各農協支所に親ラジオを設置、放送を開始したのである。これらの有線放送も、電話網の発展、テレビの普及などにより廃止されるに至った。

下金山では、昭和八年ごろまでは、青年会館が興行の場として、しばしば利用された。街回りが出たのもこの時代であった。昭和八年に公会堂が建設され利用された。戦後の昭和二五年、今井興業部(今井美之)の巡回映画興行の活動が目立った。

電化の推移 金山に富士製紙株式会社第六工場が創業したのは、明治四一年(一九〇八)九月であり、空知川を利用した水力タービンにより自家発電を行い、社宅に点灯したのが、本村における電化の先駆であった。大正九年(一九二〇)には、工場で施設を拡張して金山市街を点灯、地域住民は早くも文明の恩恵に浴することができた。しかし、昭和五年六月に会社の合理化により第六工場は閉鎖の止むなきに至ったが、発電施設は、そのまま北海道電力株式会社を引き継がれてことなきを得た。昭和八年、王子製紙、富士製紙、樺太工業の三社が合併、続いて戦時中に電力統制により日本発送電力株式会社に統合された(『村史』)。

落合における伊藤組木工場の創立は、明治四四年(一九一七)七月であり、木工場は自家発電であった。「村勢要覧」(昭和四年版)によれば、「落合電燈株式会社、大正一四年一二月設立、目的は点燈、資本金五〇〇〇円」の記載があり、落合市街地が点灯したのはこの時であった。

前記のほか、幾寅、鹿越、下金山の三地区は電気の供給がなく、文化の光りに恵まれていなかった。そこで昭和九年一〇月に

劇場 明治から大正初期にかけて、本村においては、ほとんどの地域で、娯楽、慰安の施設はなく、活動写真や芝居の興行は、学校や倉庫あるいは部落会館などが利用された。落合に本格的な劇場が創業したのは昭和一二年で、経営者は山上富次郎であった。山上栄昭が継承して、三二年八月一五日に劇場を改築し興業したが、テレビなどの普及により数年で廃業した。当地域も大正時代は興行に倉庫などを利用した。

幾寅では、劇場の先駆は、幾寅座(経営主山岸与平)であった。昭和二九年、幾寅劇場(経営主鈴木和男)が創業したが、三〇年代のテレビ普及により廃業した。

金山は、明治四〇年(一九〇七)に、石田某(土建業者)が、黄金町神社前通りに劇場を創業したのが先駆で、通称「芝居小屋」と呼ばれ、活動写真より芝居の興行が多かったといわれる。その後、大正一一年(一九二二)に、中原熊市が継承、建物を自己所有地へ移転し興行した。当時は、映画と芝居を組み合わせた連鎖劇の流行した時代で、大正末期まで興行した。金山では富士製紙株式会社が、ダイヤモンド座と称する劇場を、大正一二、三年(一九二三〜二四)ごろ創設、昭和五年の会社閉鎖時まで興行した。その後、川島旅館裏の倉庫が利用された。戦後、昭和三一年七月、金映座(経営主磯江茂)が創業したが、テレビの普及などにより数年で廃業した(『村史』)。

この三地区を電化する目的で、昭南電灯株式会社が設立された。昭南電灯株式会社設立計画は、昭和六年から北海道電力株式会社に在職の山田広らによって進められ、伏議土田中喜代松(旭川)が社長となり、二年間苦難の創成期を勤め、その後は相田仁太郎が社長を継ぎ、技術部門には北電から高清左エ門が参加した。地元重役は上野慶次郎、山岸与平、黒田善八で、旭川からは福井栄太郎、小寺謙治、進藤某らが参画した。

金山発電所から電気の供給を受け、下金山市街が点灯したのは、一〇年一二月三一日(大晦日)のことであった。鹿越への配線は、鉄道や空知川に添い、当時は下農耕地集落も点灯されたが、二七年の路線変更により電柱は撤去され、再び無灯火地帯へ逆行の運命をたどったのである。配線は東鹿越は通らず、伊勢団地に出て、基線道路が最終地点の幾寅へ通じた。幾寅市街の電化は一一年で、九月一七日の祭典の日であった。

昭南電灯株式会社は、その後四年間経営され、一五年に北海道電力株式会社に買収された。

北電はその後落合までの送電を実施、伊藤組落合木工場自家発電は、水力による電気供給に移行した。

北電の送電経路は、野花南、奔茂尻両発電所―富良野、山部両変電所―下金山開閉所―西達布変電所―東鹿越変電所―幾寅、落